

# 「ASEAN 諸国との連携・協働による次世代医学・保健学グローバルリーダーの育成」プログラム参加報告書

神戸大学大学院保健学研究科 博士課程前期1年 吉満 彩子

## 1. はじめに

今回私は神戸大学の「ASEAN 諸国との連携・協働による次世代医学・保健学グローバルリーダーの育成」プログラムのうち3ヶ月の研究プログラムに参加し、タイのチェンマイ大学で学ぶという貴重な経験をする事ができた。私が実際に参加した授業等についてここに報告する。

## 2. 参加プログラムの概要

今回私が参加した研究プログラムでは、大学での授業に学生とともに参加したりセミナーに参加することで単位認定を受けるというものである。以下に、私が参加した授業の概要を挙げる。

### ・ チェンマイ大学での体験

#### Community Visit Study-1

Date: 2013/11/

Place: チェンマイ県サーラピー群の Paketti Village

ある小単位の地域住民に対し、その地域における健康問題を調査し健康教育を実施するという主旨の実習に参加した。訪問は計3回行い、初回で健康状況を把握したマップを作製し2回目は公共の施設で集団に対しての健康教育、3回目は戸別訪問を実施し後日キャンパスにて活動内容の反省会を行うというのが一連の流れである。

私が参加したのは第2回の集団への健康教育と第3回の個別訪問の健康調査であった。平日の日中という時間帯も影響しているのか参加者のほとんどは高齢者でその多くは女性であった。主な健康問題は、高血圧、肥満、糖尿病というように日本の状況と同じであることが興味深かった。会場は複数のエリアに分けられ身長や血圧などの測定・記録、食事指導、服薬指導、簡単

なエクササイズの紹介から構成されている。各々のエリアでは学生が住民が理解しやすいように写真や実際の調味料や内服薬管理用の道具を使いながら簡潔に説明を行ったり、エクササイズで使用する道具も手作りするなど細かなところまでオリジナリティ溢れる内容であった。実施日には地域のヘルスポランティアも参加しており、このような協働により地域住民の健康問題を良く知る人からの協力得られ、かつ特別な資格を持たないこのボランティアスタッフに対しても知識提供の機会となっていると考えられる。

戸別訪問指導では、予め把握している対象者の情報をもとにフィジカルチェック、問診、指導を行うものである。フィジカルチェックでは大学から持参した物品を使用して対象者に必要と思われる項目を選択し実施することになっていた。対象者のみならず対象者の家族向けにも内容の異なる情報を載せたパンフレットを配布するなど対象に合わせた指導を展開していた。



## ・ Community Visit Study-2

Date: 2013/11/8

小学校での健康教育実習で、今回の対象はチェンマイ市内の公立小学校に通う1年生である。ここでの指導内容も予め得た情報からいくつかのトピックス(う歯、手洗い、肥満)に焦点を当てて実施。手洗いの重要性を寸劇を通して伝えたり、セルフチェックの方法を歌に合わせて指導するなど対象者の年齢や理解力に合わせた指導を展開していた。私が受けた児童の印象は、肥満児が多いことであった。学生が実際に行ったヘルスチェックの結果は実際に学校の保健室に重要なデータとして引き継がれ、気になる点があった児童に対しては保護者への指導を記載したメモを配布するなど学校での健康指

導にそのまま活かされていたことが特徴的であった。



- **Observation of Hospital**

**Date:**2013/11/26 **Place:**スワンドーク病院

産科病棟と手術室見、病院内のクリニックを見学させて頂いた。産科病棟では4年生が実習中であり、受け持ち妊婦・褥婦のバイタル測定や授乳指導、産後にICUに入室した褥婦のケアなどを行っていた。病室は全て相部屋で、基本的には母子同室となっている。分娩室も一部屋に数台の分娩台が並んでおりカーテンで仕切る仕組みである。大学病院故ハイリスクの妊婦が多く来院しているのが特徴であった。チェンマイでも高齢出産が年々増えてきており、それに伴うハイリスク出産やダウン症児の増加が課題であるとのことだった。また、妊婦の3-4割が貧血であることも大きな問題であるとのことだった。ここでも学生は、基礎的なマタニティエクササイズから、重症患者のケアまで幅広く担当していることが印象的であった。

- **Community Visit Study-3**

**Date:** 2013/12/16 **Place:** Viengping Children's Home

政府機関の孤児院訪問プログラム。新生児から18歳までの子供300名ほどが施設で暮らしており、教育や医療のサポートを受けている。山岳民族の出身やHIV/AIDS孤児、最近ではミャンマーから来た子供も増えているとのことであった。この孤児院で私たちは子供が楽しめる様なアクティビティを考え実施した。

授業に参加して感じた事

① 臨床へ直結した実習内容

学生の実習とは思えないほど実際の臨床に直結した内容であると感じた。日本では学生時代に実習と卒後の臨床とのギャップがしばしば問題になるが、学生に任されている内容も豊富でこれだけ多くの経験が学生のうちにできればこのギャップもかなり埋められるのではないかと感じた。

② PDCA(Plan-Do-Check-Act)サイクル

Community Visit の一連の流れを見ていると、学生が非常に積極的であること、学生の主体性が尊重されていること、PDCA サイクルに基づき指導を展開させていることが非常に印象的であった。振り返りの時間でも発言が途切れる事なく、学生の意欲の高さを実感するものであった。

③ チェンマイにおける健康問題

実習に参加した上での断片的な情報からの感想ではあるが、子供の肥満、高齢出産、生活習慣病の増加、というように日本の抱える問題と大差ない状況が伺えた。背景には、食生活の変化、高齢化、女性の初婚年齢の上昇などがあり、その影響は私がタイにくる以前に抱いていた想像をはるかにしのぐものであり、急速な経済成長がもたらす健康問題を目の当たりにした。少し先にこの状況に突入した日本における課題や対策を紹介するなど今後のさらなるヘルスケアシステム構築における協力が重要となると痛感した。

• Presentation of my research

Date: 2013/12/23

看護学部の大学院生を対象に私の研究内容についてプレゼンテーションを行う機会を頂いた。特に自律神経活動の項目では手法について興味深い様子で聴講していただけたことが非常に嬉しく、また学生の高い向学心を感じた。自分の研究をいかに分かりやすく説明するか、また研究の必要性をどうしたら理解してもらえるかをプレゼンテーションを通して伝えるプロセスは、自分の研究をより深く理解するきっかけにもなり、また英語でプレゼンテーションをしていると、ここに来た当初よりは英語が上達している実感が

もてたことがなにより嬉しかった。

忙しい中時間を割いて真剣に聞いてくださった学生の皆様や、このような素晴らしい機会を設けてくださった教授に非常に感謝している。



### 3. プログラムを通して感じた事

まず、大学の教育レベルの高さに非常に驚かされた。病院や学校の設備面では日本の方が最新の医療機器などを備えているが、教員、職員、学生など医療に係る全ての人のモチベーションはとても高かった。大学という場で、チェンマイ、タイ、さらにはアジアの健康向上を自らが牽引していくのだという強い誇りと責任感に皆満ちあふれており、自分もいち学生として社会にどう貢献して行くべきか改めて考えさせられた。

また、先にも述べたが、タイの抱える健康問題は既に日本のものと大差ないことに驚かされた。タイの経済発展はかなり急速であり、発展に伴って生じる健康問題への対策が十分に整備されぬままの現状も伺えた。また、日本と異なる地理的環境(島国ではないということ)がもたらす問題など、時代の流れとともに新たな問題が生じている事も知る事ができた。滞在し、現地の生活を知り、身をもって体験したり現場の話を聞かなければ見えてこない多くの事をこの3ヶ月で得る事ができたと思っている。

### 4. まとめ

今回のプログラムは大学での授業を中心とした生活がメインではあるが、私はそれ以上に大学以外の日常生活からもチェンマイの生活を深く知る事ができ、コミュニティヘルスの面白さややりがいを感じることがとな

った。このように人々の生活に密接に関わられたのも長期滞在の最大の利点の一つであり、このような素晴らしい機会を得られた事に非常に感謝している。

今回の滞在中は、神戸大学の支援はもちろんのこと、チェンマイ大学の教員、学生、職員、大学病院の職員など本当に多くの人々の支援があつてこそ無事に終えられたものであり、そのような人たちの協力に感謝の意を表するとともに、この学びを必ず何らかの形で還元したいと思う。